

---

# 彼氏が欲しい!!

快丈凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼氏が欲しい！！

### 【Zコード】

N2141A

### 【作者名】

快文凪

### 【あらすじ】

伊夜は彼氏が欲しい。目的はただ一つ！とびっきりの恋愛をすること……でも思いとはうらはらになかなか彼氏が出来ない…。果たして伊夜に恋人は出来るのか？！

## 仲良し3人組。

私は彼氏が欲しい。

抱き合うだの、キスだのはーの次・三の次。

私は恋がしたい。

相手のことしか考えられなくなるくらい、誰かを好きになりたい。思つてもらいたい…。

「なあーんで、私には彼氏がないのかねえ…。」

机に突つ伏し、開け放つた窓の外を見ながら私はぼやいた。

「何？伊夜、彼氏欲しいの？」

そんな私を、友達の佐織が除きこんだ。…にやけてる…完全にバカにしてる…。

むくれて反対がわを向ぐ。

「もー、伊夜ちゃん可愛すぎいー」

爆笑する佐織。…つたく！…人の気も知らないで…！

「なに？さおりん、いよつちイジメてんの？混せてよつ！」

もう一人の友達・信子<sup>のぶこ</sup>が嬉しそうに近寄つてくる。

「のぶ！また伊夜が彼氏欲しいって。」

「あらあら、いよつち、またそんな事言つてんの？ウチらが居んじやん。」

佐織と信子は一人でニヤニヤしてゐる。

「信ちゃんは彼氏いんじゃん。説得力無いよ。」

私がそう言つと、信子は私の向かいがわに黙つて座る。

「彼氏と信ちゃんさ、ラブランジyan。私も彼氏作つてそつなりたいよ。」

私は信子の方を見ないで続けた。

「伊夜はホントに無知だねえ。」

佐織があきれた様に言つ。

「悪かつたね、無知で。」

すると、今度は信子が口を開く。

「あのね、いよっち。私と真司はラブラブなんかじゃないわよ。」

「… そうなの？」

「そうよ。それに、男なんて恋愛するより、触れたりキスしたりすることしか頭に無いのよ。」

「違つ…。世の中の男はそんなのばつかじやないはず。」

「どうして？ どうしてそつて言いきれるのよ。」

私は顔をあげ、ムキになつて反論する。

「でもさ、伊夜つてホントに今まで付き合つたこと、無いの？」

佐織が話題をかえる。

「そうよ。… 佐織だつて無いじやん。… 寂しくないの？」

「別に。私は男に囲まれて育つたからねえ。」

佐織は下に2人の弟がいる。

近所にも同世代の女友達がいなかつたせいが、性格もビックアッサリして、男にも全くといって良いほど興味無い。

…なぜか美形のアイドルや俳優にはたくさん好きな人いるみたいだけ…。

「でもさ、佐織は良いよ。可愛いし、まづげ長いし、胸も私よりも大きいし…。」

「…よつち、それを言つなら私は…によつちよつ胸無いよ。」

「信ちゃんは良いの！ 彼氏いるじやんつ！」

私はため息をついた。

そう言いながら、自分で自分を惨めにしている…。その状態が嫌だ。信子は下に一人弟はいるけど上にお姉さんがいて、どこか大人っぽい。

オシャレだし、ファッションセンスも良い。

私と同じで眼鏡をかけているけど、私より可愛い眼鏡だ。

「だから、男は節穴なのよ。いよっち、こんなに可愛いのに付き合わないなんて…！」

「…無理しなくて良いよ… 頭悪いし、スポーツはできないし… テブ

だし…眼鏡だし…。」

「伊夜はデブじゃないよ。でも痩せてもない。」

「ちょうどいいんじやん、いよっち。それに眼鏡イヤならコンタクトにすれば?」

「イヤ。痛いし、面倒だし、高い。」

「なら無理じやん。伊夜。他に何が不満よ?」

「私はこれまでナンパもチカンもストーカーもあつたことない。」

「いよっち…あいたいの?」

信子が吹き出す。佐織も笑ってる。

「確かに迷惑だし、犯罪だけどさ、二人とも声かけられたりしたんでしょ?」

「さおりん、あるの?」

「…まあ…。のぶは?」

「…あるかな…チカンとストーカーは無いけど。」

「…私も…。」

二人は確認しあってる。

「あー、もー良い。私、帰る。なんで教室にいつまでも残ってるのよ。」

私は勢い良く、イスから立ち上がった。

「あ、んじや私もっ。伊夜、待つてよ~。」

「わたしもっ!」

こうして、なんだかんだ言って、私たちは3人で過ごす。それが当たり前で自然だつたからだ。

もう夕日が沈む。3つの影がゆらゆら揺れながら並んでいる。

今日も何の出会いもなかつたな…。私はずっと、そればかりを考えていた…。

## ミサンガに願いを込めて。

今日は土曜日。運動部に入っていない私には、休日だ。  
こんな日は必ず外へ行く。

もしかしたら、出会いのチャンスがあるかもしれない！…今まで一度も無かつたけど…。

私はとりあえず目的を作った。

今日発売の雑誌を買いに行く。

…別に今日じゃなくても良いけど、外へ行く口実だ。他人へも、自分へも…

外へ出ると空気が清々しかった。早朝でも無いけど。

私はいつも行く本屋へ行き、雑誌を買った。

ついでに30分ぐらい立ち読みをして、本屋を出た。

…用件が終ってしまった…。

他にすることも無いし、諦めて帰ろう…と思つたら、私は雑貨屋さんの前で足をとめた。

…良く分からんんだけど、行つてみようかな…という気分になつた。

雑貨屋さんの中は可愛い小物やアクセサリーでいっぱいだ。見ていて飽きない。

私は以前から雑貨屋さんの雰囲気が好きだった。

でも最近はあまり行つていなかつたから余計にワクワクしていた。

その時、なぜか私はミサンガの前で立ち止まつた。

「…綺麗…。」

つい声に出でしまつた。でも、そのミサンガはそれくらい綺麗だつた。

スカイブルーに近いブルーと紺色、それに鮮やかなグリーンの糸できているミサンガ。

ミサンガは小さなバスケットの中に入つていて、その少し上にお店

の人が書いた紹介文があつた。

『アナタの願いを叶えるミサンガ。そのミサンガが切れたとき、きっとアナタの願いも叶うはず！』

…願い…か…。

私の願いは一つしかない。…彼氏を作ること…そして、恋をすること！

私はミサンガを取り、レジに向かつた。

そしてお店から出たら、すぐにそれをつけた。

…ミサンガって…切れるまでにどのくらいかかるのかな…

気休めだらうとなんだらうと、やれそうな事はやってみなきや…！

私は家へ向かつて歩き出した。

…その時。

ナゼだろ？…ミサンガをつけた左の手首が引っ張られたような気がした。

私は手首の方を見てみると…明らかに怖そうな男の人の袖のボタンに私のミサンガが絡まっている…。…マズイッ…！

私はおお慌てで

「すっ、すいませんっ！！スグに外しますっ！！」

と言つて外そうとした…けど、ミサンガは頑固に絡みついて取れない…。

「…切ろうか、ソレ。」

男の人に声をかけられた。…うん、もう、無理だね…。

「はい…でも、ハサミ…」

と私が言つた瞬間、その人はポケットからサバイバルナイフを取りだし、ミサンガを切つた。

私は突然のナイフの登場に驚いた。…その拍子に男の人を見た。  
髪は明るい茶色。

耳にはピアス、服装も派手で見るからにガラが悪そ…でも、年は私とそんなに変わらない気がした。

「ハイ、コレ。」

と言つてその人はミサンガの残骸を私に手渡した。

…早すぎる…ミサンガが切れるには…。もしや最短記録ではないのか？

私が頭の中でゴチャゴチャ考へていると、

「…じゃあ、俺、行くんで。」

と言つて、その人は私とは反対方向へ去つて行つた。

私はなんとも言えないブルーな気分だった。

…ミサンガには、確かに早く切れてほしかつたけど、それは願いが叶う前提で…だ。

…もしかして…あの人が…？

いや、そんなはずない。

私の理想と違う。

あんなにガラが悪そうな人が好みではないもの。…顔はちょっと好みだけど。

でも、何しろその人の名前や年や…イロイロ分からないじゃん。

買ってつけて15分で切れるなんて、ミサンガも想定外よ。

私はそう自分に言い聞かせて納得した…事にした。

やっぱ、私には彼氏は無理なのかな…と思つてしまふ土曜の昼下がりだった。

## プレイボーイ。

週があけた月曜日、学校に行つて私はミサンガの事を佐織と信子に話した。

二人は案の定大爆笑だった。

「伊夜、可愛過ぎーー！」

「いよっち、なんで土曜日に呼んでくれなかつたのよーー！」

「うつさいなー。言つたらこうなるつて目に見えてたから言わなかつたんだよー！」

…悔しいといひよりもむしろむなし。…あまりに自分が惨めで…。

「あははは、でもさ、本当にその人が誰か分からぬの？」

信子はこっちを見て言う。

「…うん。でもかなりタチ悪そな不良っぽかつた…。」

「意外と運命の出会いだつたかもねえ。」

ボソッと言つ佐織。

冗談じやないわよ。他人事だと思つて…。

「とにかく、もつあの事は土曜日に全部終わつたのつーこれ以上からかわないでよ。」

またムキになる私。

「ま、良いじやん。ホントに運命ならまた再会するだらうじ。」

ニヤケて言う信子。その横で佐織もうんうん、と頷いている。

「…そうだよね。ま、いつか。これにめげずに新しい恋探すぞーつ。」

「あれ、伊夜にしては前向きじやん。」

驚いたような佐織。

「なんかあつさり終わつたせいかな…意外とさっぱりしてんの。」

「ほあ…それは良い傾向なんぢやない?いつまでもよくよしているのもどうかと思うし。」

信子も納得したような顔だ。

「よし、んじやあ気晴らしに保健室行こー！」

私たちには保健室へと向かつた。

保健室の先生・向井先生は去年大学を卒業したばかりの若くて明るい。

親しみやすい性格なので保健室は休息の場になっていた。

「先生、来たよ~」

信子が少しなれなれしく呼ぶ。他の先生は絶対に怒るが向井先生だけは違つた。

「おっ、のぶちゃん! さおちゃんにいよつちも! こらつしゃい!!」  
こんな風に先生自体が生徒をあだ名で呼ぶため、どうしても友達みたいになる。

今日も保健室はたくさんの中学生たちで賑わっていた。  
別にみんな体調が悪いわけでも、怪我をしているわけでも無いけど、安らぎを求めて自然と保健室に人が集まる。

「先生、授業めんべー。保健室で寝よっかなあ。」

佐織が半ば本気かとも取れるような言葉を発する。

「さおちゃん、具合が悪いなら喜んで寝かせるけど、サボリにはベッドは使わせないよ。」

向井先生にあつさり断られて佐織はしきつと悔しそうな顔する。

「ところで、みんな、もうお昼は食べたの?」

「うん。とづくに。」

「オッケー オッケー。ベーグッドだよ。君たち、ダイエットなんかしちゃダメだよ。」

「はあーい。」

私たちは声を揃えて返事をした。やつぱり向井先生は好きだなあ……。  
その時、笑う私たちの後ろから、男の子の声がした。

「先生、オレ、昼から授業出るよ。」

「お、キヨ、偉い偉い。布団置んだかい?」

「うん。」

私は後ろを振り返った……。

「あつ……」

私とキヨと呼ばれた男の子は同時に声をあげた。

「昨日のミサンガを切った人だ。」

「あれ？ キヨ、 いよっちと知り合いで？」

向井先生は意外そうな顔をする。

「えつ… 知り合いつていうか…。 アンタ、 ロロの生徒だつたんだ…。」

「…あなたも…。」

気まずい沈黙。

佐織と信子は状況を理解したのか、ニヤニヤしてゐる。向井先生だけは分からぬみたいだ。

「えつと… 昨日は「メン… 今度弁償するよ…。」

「あ、 気にしないで。 怖いしたものじゃなかつたし…。」

「そお？… あ、 オレ、 2 D組の松本清春まつもときよはるつていうんだ。」

「私は2 B 香坂伊夜こうさか いよい。」

「ふうん… 悪いけどオレそろそろ行くわじゃあね、 先生。」

そう言って清春は行つてしまつた。

「…会つちやつた… また…。」

私はボソッとつぶやいた。すると今まで言いたいことを我慢していつた佐織と信子が、

「ねえ、 さつきの人でしょ。 ミサンガの人！」

「よりによつてD組の松本とはねえ…。」

と、 口々に話し始める。

すると向井先生まで興味深そうに聞いてきた。

「ねえ、 いよっちつてキヨと仲良いの？」

「ち…違います…。 土曜日たまたま会つただけです…。」

私はうろたえながら答えた。ところが佐織がそんな私に追い打ちをかけるように言った。

「でもそれが運命の出会いだつたんだもんねえ、 伊夜。」

「やめてよ。そんなんじゃないって。」

「うん… 確かに違うかもね…。」

と、信子がいつになく真面目な顔で言った。

「のぶちゃん？ 何か知ってるの？」

「……いよっちは松本の別名知ってる？」

「別名？ ……そんなのがある人なのか…？」

「……知らないけど…。」

「……プレイボーイ・キヨ…。」

「……プレイボーイ・イ。私は分かりやすすぎるのであだ名にかえって笑えた。

「何？ キヨってそんな風に呼ばれてるの？」

「そうですよ、先生！ D組の松本って言つたら1週間！」と付き合つてゐる女が違うつて有名なんですから！」

力を込めて話す信子。すると話を聞いてた佐織が横から、

「あ…聞いたことある… 女の取り合いで他校とケンカして謹慎ぐらつたつていう…」

「そう、それ。だから純愛を求める、いよっちは向かないと思つけどなあ…。」

「悪いけど、そんな気ないから。」

私は少し怒つて反論した。

「そうなの？ いよっちとお似合いだと思うけどな…。それにキヨはそれ程悪い子じゃないよ。」

向井先生は苦笑する。

その時、チャイムが鳴つた。騒いでいた生徒たちが自分のクラスへと帰つていぐ。

「さあさあ、みんな帰つた帰つた。授業遅れるよー！」

向井先生は追い立てるよつた口調で言つた。でもその声はどこかあたかかい。

「はいはい。またね、先生！」

私たちもそう言って保健室を出していく。

私はふと青春が寝ていたらしきベッドの方を見た。

几帳面に折り畳まれた布団が床に入つてきて、なぜかその光景がし

ばらく頭から離れなかつた…。

## やつぱり運命。

プレイボーイ…。

直訳すれば遊ぶ男の子。

プレイボーイが運命の人だなんて、信じるもんか！

放課後…私は一人だった。

佐織は部活があるという。信子は彼氏の誕生日らしい、今日は一緒に帰るそうだ。

「…独り者はつらいなあ…。」

ボソッと独り言。まあ、佐織は彼氏いないけどわ。

私は一人が好きだけど嫌いだ。

一人は気楽だけど、やつぱり寂しい。話し相手が欲しかった。

「あ…おい、アンタ！」

後ろから男の人の声がして、振り向いた。もしかして…ナンパ？するとそこには…

「あ…ア…」

青春が立っていたのだ。ついプレイボーイと言いかけた。危ない危ない…。

「ア…ア…？」

「あ、気にしないで…、松本君。」

「あ、青春で良いよ。…長いからみんなキヨつて言つけど。」

「じゃあキヨで良い？私も呼び捨てで良いよ。伊夜つていうの。」

「伊夜…変わった名前だな。」

「…そうかな…。あ、帰り？」

「うん…伊夜も？」

「…うん。」

「なぜか沈黙。」

ま…今日改めてお互いの素性を知ったわけだし…一緒に帰ろうとか言えないなあ…。

そんなことを思つていったら、キヨが話しかけてきた。

「なあ、土曜日の//サンガ、弁償するよ。いいや？」

「えっ…ホントにもういいよ…。気にしないで。ボタンに引っかけ

たのは私なんだし……。

「ふうん……あ、わ、な、れ、」

そへ、書いたなかで三か部を近づけてきた

耳元でささやかれた。…マズい…力ぬける…。

「なつ…何言い出すのよ!つていうか、今日ははじめて誰か分かつた

「何?動搖してんの?伊夜つて男

ムキになつて……

「はあ？何言つてんのよ。私はキヨみたいに軽そうな男はイヤなの。

「直覺してゐなんて 夕チ悪つて

「オレと付き合つても、一週間しか一緒にいなによ。」

「靈氣。子孫が

別れるの？」

伊夜は絶情たねえ

「…みんなそんなんじゃないの？」

「悪いけど違うよ。少なくともオレは。付き合ってた中には何人か居たけどね。しつこかったヤツ。こつちは別れるって言つてんのに、ずっとその気でいんだよ。笑っちゃうね。」

そう言つてまた乾いた笑い。

「……それ、本気で言ひてんの？」

「当たり前だろ。そもそも男と女が付き合つなんて本能だろ。誰だ

つて持つてる。普段は理性だと世間とかに抑えられてたって、所詮人間は人間。それくらいにしか思つてないよ。」

「なにそれ……そんなのおかしいよ。絶対変。

「……最悪……ドキドキしないの? 好きで好きでたまらないとか……思つたことないの?」

「ないね。恋も愛もない。根本は本能の問題。最終的には人間つていう種族を生き残らせるためのモノだろ。」

すらすらと言うキヨ。

「信じない。そんなの。少なくとも私は違う。」

「じゃあ伊夜は運命とか信じるの? 純愛はあると思う?」

「思う。」

「ははは。どこまでも夢見る女の子だな。男はほとんどなぁ、女は自分の欲求を満たすためのモノだとしか思つてないよ。そもそも女とは作りが違うんだ。」

「……じゃあ……キヨも女の子の事……そんな風にしか思つてないの?」「当たり前だ。それに、付き合つなんてめんどくさい。オレは最小限の事ができればそれで良いんだけど。」

「最小限……」

「してやるうか?」

「なつ……どこまでバカにする気!…

「ふざけないでよ。」

なんだか、腹を立てるのがバカバカしくなった。

「はははっ。ホントに免疫無いんだなあ。ある意味伊夜みたいな子も好きだけど。」

「私はキレイ。」

私はキヨから田を離した。見たくもない。

すると、急にキヨは私の手首の辺りをつかんだ。

「いたつ……何するのよ……」

「女つてさ、不便だよね。力で男に勝てないもんね。」

「すごい力……ふりほどけない……。」

すると、キヨは急に手を離した。

「やめたつ。キスの一つでもしてやなかつかと思つたけど、オレは嫌がる女をいたぶる趣味無いし。」

「…ドキドキしてゐ…。ホントに免疫無いんだ…私…キスつて言葉にドキドキしてゐ…。」

黙つて背中を向ける私に、キヨは聞いた。

「男、幻滅した?でも、事実だから。伊夜には悪いけど。」

その時、私は自分でモビツクリする事を言つていた。

「キヨ、付き合おう。」

「はあ?今、なんつた?」

私は向き直つてキッヒキヨを睨むよつて見た。

「キヨ、私と付き合いたいんでしょ。付き合おう。私がキヨを変え  
てあげる。」

「伊夜や、何言つてんの?」

「ドキドキしない恋なんてホントの恋じやないよ。私とホントの恋  
しよひ。私がキヨをやうせさせてみせるから。」

「へえ。オレを変える…。ホントにできるの?」

「する。1週間しか持たない付き合いなんかじやない。土曜日の出  
会いが運命だつて言つならそうかもしね。」

「運命ねえ。ホントに伊夜にできるの?男と付き合つたこと無こん  
だる。」

「その方がかえつて都合良じやない。」

「はははは。ま、オレは良じやない。過度しないですみそつだし。た  
だし、」

「オレが伊夜に飽きたらその時点で別れる。呪いな。」

「良いわ。」

「よし、じゃあ、ま、よろしく。」

やつぱりキヨは帰つて行つた。

…キヨが見えなくなつたら、急に全身の力が抜けてきた。

…ドキドキした…心臓の鼓動がありえない。

男の子つて…あんなに力強いんだ…。声、低いんだ…。

知ってるはずの事が一つ一つ新鮮で、鮮明に残っている。

はつきり言って、自信は無い。

キヨを変える…なんて大きな事を言い切ったけど…確かにキヨの言うとおり、私は男を知らない。

でも、だからこそできることがあるはずだ。

理想とは違ったけど、私は男の子と付き合いつ。これは事実じゃん。

…それに…

私、自分で言つておきながらキヨの事、本当に好きになつたみたいだ。今日改めて知つたばかりのはずだけど。

私のドキドキなんて、キヨは分からぬだらう。

なんとも思わないかもしねれない。

でも、今はそれで良い。これからキヨにドキドキしてもいいんだ。わたしの顔と同じぐらい赤い夕焼けを見て、私はそんな事を思つていた。

## まじめの一歩。

私たちの出会いは突然だった。

それって運命だったのかな……？

「付き合つの？！あのプレイボーイと…」

佐織と信子が声をそろえて叫んだ。

「ちょっと、もう少し静かにしてよ…。」

ここは帰り道にあるハンバーガーショップ。

周りのお客さんは突然の叫び声に驚いて、じっと見ていた。

「それで？どうして付き合つたと思つたのよ。」

さすがに周囲の視線を感じたのか、わざとよりも声をひそめて佐織が尋ねた。

「なんか、キヨってホントの恋愛してないなって…そう思つたら、それじゃダメだつて思つて…。」

「ま、いよっちは恋、してないけどね。」

呆れたような口調で素っ気なく言ひ放つ信子。

「…ただけど…。」

「でもさ、伊夜、よりこよつてプレイボーイだよーそんな奴とホントの恋するつて、本氣でできると思つてるの？」

佐織が聞く。

「…やつてみる。」

…それしか言えない…。

「やつてみるつて？どうしてみるのよ？

信子はいつになく突つ込んでくる。

「…もう、良いから。ごめん、こんなこと話して。私、帰る。」

私はその場に居られなくなつて席を立つた。

「ちょっと、伊夜！」

後ろの方で佐織の声がした。でも、そのあとで小さく信子の声が

「まつときなよ。」

と聞こえた。

「私は悔しかった。私に理解を示してくれない友だち……。どんな人だろうと私は付き合つて決めた。……なのに……。」

「よお、伊夜ちゃん！」

後ろから肩をつかまれた。

声が男だ！

ギョッとして振り返ると……。

「……なんだ、キヨか……。」

「なんだじやないだる。俺で、一応彼氏なんですけど。」

キヨは不満そうに言つた。

「……『しめん』。帰り？一緒に帰らなーい？

「おう。」

私達は歩き出した。

微妙な距離を保ちながら。

「……なあ……」

キヨが話しかけた。

「なんかあつたのかよ？」

「……まあ……いろいろ……」

「ま、あんまり気にすんなよなな

あつさりと言うキヨ。

「誰のせいで落ち込んでると思つてんのよ！

「うん……？ 待てよ……。気にするな……って事は、多少励ましてくれてるの？」

「……なんだ、キヨつて優しいじやん」

唐突に……しかも自然に私が言い放つたせいか、キヨはびっくりしてこっちを見た。

「別につ、優しくねえよつ。こきなりなんなんだよオマエ……。」

「……そんなにムキにならなくとも……」

「伊夜が変なこと言うからだろ。……つたく……そもそも俺たちが付き

会いはじめた訳、分かってるのか？」

「忘れてないよ。…私のこと…飽きた？」

「…飽きたっていうか呆れた。俺に立てつく女は伊夜がはじめてだったのに…特に何も無いじゃん」

「な…何もって…どんな事があつたら良いのよ…？」

「ま、普通なら昨日の間にキスする。早かつたらその先もやつてる」

「…その先…」

…なにそれ…だいたい想像出来るけど…。

「何？興味あんの？」

からかいつぶつていつぶつキヨ。

「違う。…そういうじゃないでしょ」

私は立ち止まってキヨを見た。

「そんなの違う。…うなるまでには時間がかかるの。そんな簡単にしないの」

「じゃあ、はじめは何すんだよ？」

私は黙つて、キヨの前に手をさしだした。  
はじめは何のことか分かつてなかつたが、理解するとキヨは私の手を握つた。

「…これからはじめるのが伊夜式かよ」

「…悪い？」

私が聞くと、キヨは

「いいえ。べつに」

と妥協した様に言つた。

キヨには悪いけど、私はこれだけでキドキしてゐるんだから…。  
大きいてのひら…。

しかも手は私の方が冷たかった。

何気に私に歩幅を合わせてくれるし…車道側歩いてくれるし…。  
ほら、キヨは優しいヤツじやん。

プレイボーイだけど…良こっこあるよ。

…何とかやれそうだよ。

私はキヨに気付かれないように、少しキヨの方へ近付いた。

キヨは気付いたのか分からぬけど、さっきより握る力が少し強くなつた気がした。

手を繋いだ二つの影は、ゆっくりとした歩調で、夕日の沈む方へ消えていった。

「伊夜！ちょっと！」

朝、登校してきた私に佐織と信子が駆け寄ってきた。

「…なによ？…おはよ…」

私は訳が分からず、とりあえず挨拶。

「つたぐ、おはようじやないわよ！昨日、プレイボーイと帰つたでしょ？」

佐織が言つた。…なにそれ。

「悪いけど、キヨだよ。確かに昨日は帰つたけど、それが何か？」

「ほつとけ…とか言つてたくせに…」

「そのキヨのせいでの、標的になつたよ、こよつ「う」

信子が言つた。

…標的…？…なに…それ…。

詳しく述ねる前に、その理由が分かつた。

急に後ろから声をかけられた。

「ちよつと良いかしら？」

振り返ると、ドラマとかにいそつた美少女が立つていた。…でも…目がキツめなカンジ。

「あ…えつと…私に用？」

「そう。ちよつと来てくれる？」

そう言つて彼女は出口に向かって歩き出した。

…なによ…。そつちがそのつもりなら…やつてやるわよ。

「のぶちゃん」

私は信子に声をかけた。

「ん？」

「「」、よひしくね」

そう言つて私はカバンを渡す。

少し驚いた顔をしたが、信子は私のカバンを受け取つて、一言。

「遅刻すんなよ。後20分だからね」

「了解！！」

私は教室を出た。

私は階段の踊り場に連れてこられた。その階段は、生徒玄関とは対側なので朝はほとんど使われていなかつた。

行つてみると、そこには2人の女子生徒がいた。

「それで？何の用？」

私はあくまでも冷静を装つて言つた。内心ビビりまくりだけと…。

「キヨと付き合つてるんでしょ？悪い事は言わないから止めなさい

私を呼び出した女の子が言つた。

「そんなの私とキヨの勝手じやない。あなたに関係ないわ」

私がそう言つと、2人のうちの一人が言つた。

「あなた、遊ばれてるのよ。痛い目に会いたくなれば彼から手を引きなさい」

…手を…引く？

「私はキヨと恋愛をしてるの。かけひきしてるんじゃないわよ」

失礼な！仮にも人の彼氏でしょっ！

「…なまいきね」

美少女は言つた。

「なまいきで結構」

私も引き下がらない。

しばらくお互いが睨みあつていた。

そのとき…

声がした…。

「もしもし、お嬢さん方、あと10分でHRですが？」

そう言つて、誰かが階段の物陰からにゅつと現れた。

…キヨだ。

「キヨ…」

美少女がつぶやく。

「よお、和深ちゃん」

陽気に行く手をヒラヒラせねキヨ。

「こいつから居たわけ？」

今度は私が言つた。

「んーと…ずっととかな。なにせ、俺の特等席だから。ハハ」

そう言って階段を指差す。

「ねえ、キヨ、なんでこんな子と付合つてたの？なんで私じゃないの？」

和深と呼ばれたその子はキヨに聞つた。

「なに？ そんなに不満か？」

「モチロンよ。しかも私と付合つてたのはあなたの方よ。なのに…」

それを聞いたキヨは

「あのセ、ハイシは和深と違つて。俺と付合つ理由も、俺に求めるものも

…え？ …？」

「どうこいつよー？」

和深はキヨにくつてかかつた。

「あの人…」

そういうと、キヨはクイッと和深のアーチを指で持ち上げた。

「アンタが俺に望んだのはなんだ？ 俺の体だろ？ 彼氏にフツレで寂しくて、俺に慰めてほしかつただけだろ？」

和深はキヨから皿をそらし、後退りした。

するとキヨは私の首に腕を回し、続けた。「でもハイシは…伊夜は…、はじめに何しよひつて言つたと思う？ 手をつなぎだつてさ」

そう言つてキヨは笑つた。私はドキドキしていた。

「悪いけどさ、俺、しばらく伊夜ところるわ。ホントの恋愛とやらができないって思ってはじめたんだ」

「あなたが…ホントの恋愛ですって？」

和深はフツと鼻で笑つた。

「悪いが、お前らみたいなプライド高くて未練がましい奴はもう沢山だよ。俺のことは諦めな。あと、伊夜にも手を出すな」キヨがキツめの口調で言つた。

その言い方に驚いたのか、和深たちは少しひるんだが、スグに

「フンッ」

とこっちを睨みながら去つていった。

3人がいなくなり、私とキヨが残つた。

「…何それ…」

私が言う。

「へつ？」

…とキヨ。

「シャツ」

私はそう言つてキヨの制服のシャツを指をした。

それは、ボタンが全部外され、裾が小さく結んであった。下に着ている、派手な青のTシャツがとても目立つ。

「何？ ヘン？」

「…派手…」

「マジか？ 俺の中では最先端のイケてるファッショングなんだけど…」

そう言つてまた笑うキヨ。

「…別に良いけど。それでも…。…あと…」

私はキヨを見た。

「ありがとう」

あえて、何に対してもお礼からは言わなかつた。全部をひっくるめてのありがとう。

そんな私の気持ちが分かつてゐるのかいないのか、キヨはお氣楽そ  
うに

「…おう」

と言つた。

「…教室…戻るうかな…」

「あ、んじや俺も

そうやつて教室へ向かおうとしたとき誰かがいた。

良く見るとそれは…

「信ちゃん！佐織！」

そこにいたのは教室にいるはずの一人だった。

「どうしたの？」

駆け寄る私。

固い表情の二人。

…キヨが降りてきた。

それに気がつき、信子がキヨを見る。

信子に気がついたキヨ。急に顔色が変わる。そして…一言呟いた。

「…信子…」

えつ？……。

今…何て…。

ここにいる全員の動きが止まった。

私は信子を見て、信子はキヨを見て、キヨは信子を見ていた。佐織だけは誰も見ないで床の方へ視線を落としていた。

…今…チャイムが鳴った…。

…全員遅刻決定。

## 知り合い以上、恋人未満。

「アンタが、失恋したんだる？」

キヨが私に初めて言つた言葉。

私は1年付き合つていた彼氏と別れた。 原因は彼氏の浮氣。 私の他に2人も彼女がいた。

『信子は良い女だと思うよ？ でも、良いだけで他には何にも無いんだ。 つまんない。 一緒にいて疲れたんだよ』  
… そう言つて私と別れた。

一人で校舎裏で泣いていた。 その時声をかけてきたのがキヨだった。 ただでさえ感傷的な私にそんな言葉は不愉快この上なかつた。

「アンタなんかに関係無いじゃない」

「…つと思うじゃん？ 実は関係アリなんだな。 ここは俺のナワバリなんだよ」

「…は？」

意味不明。

「キミも、今は授業中ですよ？ それとも何？ 僕ねらい？」

… 何？ この男。

「ふざけんじやないわよ。 もう男はこいつりなの。 それに、アナタだって授業サボつてるじゃない！」

「俺は良いの。 常連さんだから。 でもキミはマジメっ子でしょ？」

「何それ。 メガネかけてたらみんなマジメっ子だと思わないでよー。 「いや…んな事言つてないし」

ケロッと答えるキヨ。

「もう、ほつといてよ」

そう言つてまた泣き出す私。

それを見て、キヨは溜め息まじりに私の横にしゃがみ込んだ。

「あのや、俺はメガネかけてる子つて、カワイイと思ひナビ?」「…そんな事で泣いてるんじゃないんだけど…」

「うん…」

急にしおりしこキヨ。

「何よ…口口口口変わつて…アナタつて変なヤツ」「けつ。勝手に言つてろ」

「…なんで隣に居るのよ?」

「…なんとなく。アンタ、ほつとけない気がしたから」

「…余計なお世話です…」

そう言つて、お互に笑いあつた。

私たちは、それから何となく一緒に居た。それが当たり前の様に…。

キヨの事、好きかキライかといえば…好きだつた。…少なくとも私は…。

告白とかは無かつた。付き合つていつ直言をキチンとしないまま、私たちは何をするにも一緒だつた。

「俺たち、恋人みたいじゃねえ?」

いつだかキヨが私に言つた。その表情が、複雑すぎてキヨの気持が分からなかつた。

私は、

「そう?」

とそつけなく返事をした。

ちょっとショックだつたから。私は付き合つてたつもりだつたから。でも、所詮つもりはつもりだつた…。

キヨに彼女ができた。

正確には私が知る前から付き合っていたから、彼女がいた…となるけど。

私がその事を知ったのは、その本人から言われたから。

「あんた、キヨのなんなの？」

私に聞いてきた人は、高校の制服を着ていた。

…私？

キヨの…友達？…それとも…

「おつ…もしかして修羅場？」

キヨが急に現れた。まるで、今まで側で見ていたかのようだ…。

「キヨ、なんでこの子とずっとといふ訳？私、アナタの彼女でしょ？」

彼女の方が私を指差しながら言った。

…どうなの？キヨ…。

すると、キヨは急に冷たい目になつた。

「悪いけど、二人とも彼女だと思つてない」

えつ…？

「俺さ、一人の女の子をずっと愛せない訳よ。どうしても飽きる。  
美佳みかも信子もただの女。それだけ」

そう言つてキヨはクルツとこっちに背を向け、ヒラヒラ手を振つて去つていつた。

ちなみに、その2日後、キヨには新しい彼女が出来ていた。私より一つ年下の子だった。

涙も出なかつた。

自分が情けなかつた。

付き合つていると想い込んでいた自分がみじめだつた。  
それから私はキヨと全く会わなかつた。会わないようにした。

風の噂で、キヨの受験する高校が私と同じと知つた。キヨが居る…  
といつ理由で志望高を変えるのもくやしくて変更はしなかつた。

高校に合格してしまひへりしたこの、彼氏ができた。今でも仲良くな  
っている。

この前、保健室で見掛けたとき、驚いたけれど平静を装つた。いよ  
つちも、さおりんも知らないから。

いよつちがキヨと付き合つと知つた。私は心配になつた。私だけで  
はなく、こよつちまで…。

いよつちが女子に呼び出されたと…つこれさおりんに言つてしまつ  
た。  
さおりんはそれを聞いて、無言でこよつちを追いかけた。私もつい  
ていつた。

結局その人たちはいなくなつた。…でもね…キヨ、アナタに言つた  
い。

「よひを、私のよひをせむれな」。

固まるキラとこよひ。つい向こうたままのやおりん。  
私は沈黙を破るよひに…キラを真つ直ぐ見て言った。

「キラ、こよひかと別れて」

## 仲直りはイチョウの木の下で。

別れる？

何で信子がそんなこと言ひつの？

そんなに私とキヨが付き合つのが気に入らない？

「信子……？」…何よ…突然…」

戸惑いながら言う私。

信子は黙つている。キヨも…。

すると、さつきまで黙つていた佐織が急に口を開いた。

「信子はね…キヨに裏切られたのよ

「違うつ！」

すぐさま反論するキヨ。

「裏切つた…？」

…訳が分からぬ私。

「いよっちは…分かってるの？キヨがどんな男か…」

「…それって…キヨがプレイボーイって事？」

「そうよ。キヨはね、一人の女じや満足出来ないのよ。だから…いつも、このまま付き合つているなら絶対に後悔する」

「…信ちゃん…」

私はキヨを見た。下唇を噛んでつづみしている。

「…こよっちは、私はいよっちは心配なの。私みたいになるんじゃない

かと思つて…「

「…信ちゃん… 一体一人に… 何があつたの…？」

黙り込む信子。

「…ひりーお前ら、早く教室に戻らんか！」

皆が振り向くと、先生が立っていた。

「今はホームルームだろ。教室へ帰りなさい」

「…はい…」

先生に促され、私たちは教室へ向かつた。

私たち3人が教室へ入ろうとしたとき、信子がキヨに一言言つた。  
「…いよっちとのこと、考えてね」

キヨは何も言わないで自分の教室へ帰つて行つた…。

遅刻した私たちは後ろからそそくさと入つた。

担任はカバンを置いたままで遅刻してきたことを少し不審に思いながらも、私たちは特におどがめ無しだった。

「信ちゃん… 聞きたいことがあるんだけど…？」

私は昼休み、信子の所へ行つた。いつもは弁当を食べるのだが、今日はそんな雰囲気ではない。

「…キヨの事？」

信子は意外と何でもない顔で言つた。

「…何があつたか…教えてくれない？」

その時、佐織がやつてきた。

「…ねえ…一人とも…昼ごはんにしない?」

気まずい雰囲気を察してだろうか?いつもより明るい声で誘つた。

「…せおりん、話が終わったら食べる。…先に食べてて良いよ」  
すると佐織は一瞬驚いた顔をしたが、何かを理解した顔をし、

「分かつた。今日は夏奈子かなこたちと食べる」

と言つて去つていった。

佐織は分かつたのだ。

信子が今、私と二人で話をしたいということ。

それを直接言わなくとも佐織なら分かるということ。

…それは私にも分かつた。…これが友達なんだな…。

私と信子は校庭の大きなイチョウの木の近くに行つた。  
今は昼休みだから、生徒はいない。

「本当はね、裏切られたんじゃなかつたんだ。キヨに…」  
信子が口をひらいた。

風が冷たい。

風にのつて、シン…と銀杏の香りがする。  
イチョウの葉が落ちる…。

私は黙つていた。

信子は私に背を向け、離れていくようになつくりとした足取りで歩く。

「片想いなのは分かつてた。一緒に居たら好きになつてた。…でも

…

振り返る信子。

「キヨには彼女がいた。その彼女は、恋人でもない私がキヨと居る

のを見ていたれなかつた。でも、実はもう、一人ともキヨは何とも思つていなかつた。」

「信ちゃん……」

「キヨはそういうヤツなのよ。片想いでもダメ、両想いになつてもダメ……いよつちに、それが耐えられる?」

「風がさらりと冷たくなる。

カサカサと葉が足元を舞う。

「…分からぬいけど、私も、ダメなのかな?」

信子より小さめな声で言つ私。

「無理よ。キヨはそういうヤツなのよ。」

「例外は無いの?」

「無いわ。…いよつちに、覚悟があるの? 捨てられるのが分かつてる相手と付き合つなんて……」

分かつてる。

怖いよ。

悲しいよ。

情けないよ。

…でも…

「分かつてるから。大丈夫だから。…キヨを…変えてやるからー。私はさつきよりも大きな声で言つた。

「…知らないよ? どうなつても…後悔しても…」

「信ちゃん、後悔は後から悔やむから後悔なんだよ」

ニコッと笑う私。

少し目を丸くする信子。

「私、後悔したって良い。キヨが好きなのー！信ひちゃんが好きだったみたいに、今は私がキヨを好きなのー！」

「いよっか……」

私は信子に近付く。

「私、キヨを変えるつて決めた。プレイボーイなんてあだ名じゃなくなるくらい、いい男にしてやるんだからつー！」

「…出来るの？いよっちは…」

「出来るかどうかは後。とりあえずしてみるのー！一人でとびっきりの恋愛をするのー！」

すると信子は小さくため息をついた。

そして少し微笑んでから、

「分かつてたよ。…やれるところまでやんな。…私は見守つとく。…でも、これだけは忘れないで」

信子はポンッと私の肩を軽くたたき、

「私はいよっちの味方だからね」

と言つて笑つた。

私も笑つた。

いつの間にか風はやんで、つるつるぐもが空を漂つていた。でも、銀杏の香りはまだ残つていた。

## 仲直り パート2。

いつもの待ち合わせ場所に居ない。  
でも、これは予測済み。

多分… アイツはまだ学校に居る。しかも… ドコに居るかも分かる…。

私は校舎裏へ行つた。

すると、案の定キヨが座り込んでいた。

「はー」

キヨの前にさしつけ皿販機で買つたレモンティーの缶をせじだす。

ビックリしたキヨはいきなり現れた腕の主を見る。

「…伊夜か…サンキヨ」

素直に受けとるキヨ。

「おーいり。…120円貰つのもなんだし…」

「ノド乾いてた。…でも…俺的にはホットが良かつたな…」

「売り切れ。文句あるなら返しなさい」

「いや。飲むよ」

少し微笑んだキヨ。

ガチャツ、プシュッ…

缶を開ける私達。

北風がふく。…もうすぐ冬かな…折角、秋になつたばかりなの…  
やはりホットが良かつたな…と思いながらボーッとしていると、キヨが話はじめた。

「…「…」が、信子と初めて会つたトコロなんだ…なんか懐かしい…」

「知ってる。…信ちゃんから聞いたよ」

「…そつか…」

また沈黙。

相変わらず北風はピューピュー吹く。

今度は私が話はじめた。

「…キヨにとつて…信ちゃんはどんな存在?」

「…恋人でないことは確か。でも友達ってのも違う…」

「…信ちゃんの事…好き…?」

「…分からぬい」

頭を抱えるように顔を伏せるキヨ。

「そういうことを真剣に考えたことが無かつた…でも…信子には好きっていう感情は無かつたと思つ…」

「…そつか…」

また沈黙。

「なら…」

私がまた言つ。

「私は?恋愛感情、ある?」

一番聞きたい」と。

するとキヨは、ある意味予想どおりの答えを言つた。

「…わからんねえ…」

「…どううと思つたよ。」

「なんで分からぬいの?」

「うーん…つまめて言えないけど…」

キヨは困ったように頭をかきながら囁く。

「なんか伊夜って、今まで会った女に居ないタイプなんだよ。それに、今まで真面目に好きとか考えた事無いし…恋愛感情ってのが、どうこの物のか分からぬ…」

「じゃあ…私と別れたい?まだ一週間過ぎてないけど…」

「いや…それは違うって分かる。多分、ここで別れたらいの先ずつと後悔する…」

「…そつか…良かった…」

「…はつきりしないヤツで悪いな…」

「なんとなく分かつてたから良いよ。キヨって、意外と手際悪いぞ」

「…そうだな…カッコ悪いな…。伊夜は…信子の事…気にしてるのか?」

「さあ…。エックリはしたけど、それほどじゃないかも」

「そつか…」

田が落ちるのが早い。辺りはもう薄暗い。

「ねえ、キヨ…」

「うん?」

「あたしたちや…」

立ち上がる私。

「これでカッフルって言えると思ひ~恋してる訳?」

「さあな…」

キヨも立ち上がる。

「良いんじゃねえ?俺らみたいなのも、きっと世の中には必要だ」

「…そういうもん?」

キヨを見上げる私。

「おさらば」

「カツと笑うキヨ。」

ま、いつか。こんなカップブルでも。  
私はキヨの事好きだもん。

うへへん…と大きくのびをするキヨ。

小さなあぐびが出た私。

「伊夜、帰るか？」

「うん。帰る」

カップブルなのか何なのか、結局曖昧に終つたけど…こんなのもアリかな…と思った、秋の放課後。

## カップルになるために。

私たちは何とか仲直りした。ケンカしていたのかどうかもよく分からぬけれど……。

でも……私は何かが違うと思つていた。

これって本当に付き合つてゐるの？私は恋がしたかったハズだ。でも今は恋するどじろか付き合つてゐるのかすら疑問……。でもその解決方法はよく分からない……。

「うーん……」

「どうした、いよっし。悩むとハゲるよ？」

「信ちゃんっ！失礼な……私はハゲませんっ！」

「そう言つてる人ほど危ないよん」

ニヤニヤと意地悪そうな顔。

……でも良かつた。また信ちゃんと普通に話せる。私にはそれが何より嬉しかつた。

「あれ？～せゆりんは？」

「部活。大会近いんだってえ……」

「そつか……ところで、真面目にどじうしたの？」

「……うーん……」信子に言つべきか……？キヨと恋人らしく付き合つはどうするか……なんて。

「あのや、変な気遣いならやめてよね。私にはもう彼氏がいるし、

キヨの事もあきらめたのよ

……そういう事なら……。

私は信子に話してみた。恋人らしくなる方法について……。

「……そつか。確かにあんたらは恋人といつより友達だよね……」

「……やつぱりそういう見えてた……。

「あんまり考へこまないほうが良いんじゃない? 気楽に考へなよ  
信子がボソッと呟つ。

「……どうこいつ」と?

「こよつちは多分、恋人だのカップルだののイメージにとらわれすぎなんだよ。実際はもっと手の届きやすい、楽なもんだよ

「……そつなかな……」

「うん。だからこそ、自然に……こよつちの思つよつこせつてみなよ  
「……そつか……そうだよね。ありがとう、信ちゃん

信子に言われて、急に肩の力が抜けた。

「ありがとう、信ちゃん」

「いえいえ、どうこいたしまして。なんかあつたらいつでも言つなよ

「…」

「うふーーー」

その後、私は信子と別れてキヨとの待ち合わせ場所に行つた。

「キヨーーー」

「遅いよ。つていうか、今まで俺より早かつたことがあるか?」

「どうだつたかな……ま、気にしないで。帰ろつ」

「……はこはこ。ちよつとは『氣にしちる』な……」

私たちは歩きだした。手を繋ぐのは当たり前になっていた。

「……ねえ、キヨ……」

「何？」

「私たちは付き合つてるんだよね？」

「一応……」

「……一応か……よしつ……」

私は立ち止まり、キヨの方を向いて言った。

「明日から、お昼は一緒に食べよう」

「……はつ？」

「私、キヨの事をもつと知りたい。キヨが何考えるのか、どう思つてゐるの、とか……だから一緒に居る時間を長くしたいんだ……ダメかな？」

「ダメじゃないけど……唐突だな……」

「思い立つたらまず実行。それが私だよ。……了解？」

「了解了解！んじゃ、明日迎えに行きます。校舎裏で食べば良いだろ」

私の粘り勝ちだ。

「ありがと。さつすがキヨ」

私は嬉しくなつて無意識の内に笑顔だ。

「調子良いなあ、オマエ」

苦笑いのキヨ。

この後も少し雑談をして、私たちは別れた。

そ、明日は『氣合』入れてやるぞっ！！

## 作戦実行……？！

朝6時……。

いつもならぐっすり眠っている時間だ。

しかし私はもう起きていた。起きて……台所に居た。

「あとは、オーギリだけだ！」

私は完成目前になつた2つのお弁当箱を見る。

私たちが目指すカツプルへの第一歩は『一緒に手作りのお弁当を食べる』事だった。そのために昨日、お昼を食べる約束を取りつけ、一時間も前から弁当づくりに励んでいた。

女つたらしで『プレイボーイ』などとあだ名がつくキヨと本当のカツプルになるためにはこれしかないといつ結論だった。

そしてそのあと無事に弁当を作り上げ、2つの弁当を大事にカバンに入れて学校へ行つた。

「おつはよー、いよっちー！」

「あ、伊夜、クマ発見」

信子と佐織が駆け寄つてくる。

「おはよお、今日は5時起きだつたんだよ……」

「5時？！何してたのよー？」

目を丸くする佐織。

「お弁当よ。お・べ・ん・と・う

つきつきしながら言つ私。

「語尾にハートが付いてるよ……もしかしてそれがいよっちの作戦

……？」

「そつ…愛妻弁当ならぬ彼女弁当よつ…」

「いや、そのままだつて、伊夜」

「何言つてもムダよ、おおりん」

呆れる一人。

「ま、見ててよ。絶対私たゞ、ビッククリするへりーのカップルになるからね」

私は既に勝つた氣でいた。

一時間目は数学。苦手だが必死で持ち堪える。

……が……眠い…

さすがに5時起きはキツイ。まぶたとまぶたがくつつくのは時間の問題だ。

ヤバイ……もう限界かも……。

睡魔に負けそうなその時、チャイムが鳴った。ラッキーだ！

先生が出ていくと同時に、私は机の上で腕を組み、顔を伏せて眠つた……。

「伊夜ー」

「によつちーーー」

……あ、遠くで声がする……。

「ダメだ、全く起きないよ……」

「もう、仕方ない。先に食べよつ。間に合わなくなるし」

……ん……？食べる……？

なんか忘れてたような……。

「あ……つ！」

ガバッと飛び起きる私。

「あ、起きた？ 伊夜」

「よく寝てたねえ、いよっち」

「人は笑いながらこっちを見て、弁当を開けだした。」

「……もしかして……」

「今はお昼だよ。しかも次は移動教室だから今食べないと次に間に合わないよ。きつぎりに起きて良かつたね、伊夜」

「……今何時？」

「あと10分で休み終わるよ。ちなみに2・3の英語は自習だつたよ。助かったねえ、いよっち」

「……次つて？」

「確かに体育だよ。しかも外だつてえ」

タヨさんワインナーを頬張る佐織。

「長距離のテストだつて。成績引っ掛かるならサボれないよ

タマゴサンドを食べながら溜め息をつく信子。

「あ……あのや……、キヨは来なかつた？」

恐る恐る尋ねる私。

「来たよ。5分前に。寝てるいよっち見たら『今日はいって言つていて』だつて」

「……最悪だ。

「キヨと何か約束してたの？」

今度はオーギリを食べる佐織。

「……まあ……ちょっと……」

「あり……あるいは、いよっちは今日、愛妻弁当だつたんじやない

ハムサンドをミルクティと一緒に食べる信子。

「……」

私は……自分のアホさに嫌気がさし、結局その後は何も食べないで

体育に向かつた。

ところが只でさえ成績が悪い体育なのに空腹で気持悪くなり、テストは最悪だった。

……放課後、キヨに何て言おつ……。

## 遅い夏休み。

「ちょっとお、まだ気にしてんの?」

放課後、佐織が話しかけてきた。

「……悪い? つていうか気にするでしょ、普通……」

机に顔をひつつける私。

「朝の意気込みはなんだつたのよ?」

「……もう忘れて……」

弱々しい私。

「キヨと帰る約束してるんじゃないの?」

「……行かないと駄目かな……」

「当たり前じゃない! 謝るのよー!」

「……行きづらいよ……」

「あのね……幼稚園児じゃないんだからわ……」

佐織がそう言った時、私の制服のブレザーの右ポケットが震えだした。

私は携帯を取りだし、新着メールを見た。

「何? メール?」

「……キヨからだ」

「ホント? 何だつて?」

「……校舎裏に居るつて……」

「何で?」

「さあ……どうこうつもりかな……」

「とりあえず行きなさいよつ!」

バンッと威勢よく背中を叩く佐織。

……なぜかそれにとても元気づけられた。

「……ありがとう、行くよ」

私は力バンをつかみ、扉へ向かった。

「健闘を祈る！」

親指を立て、元気よく言つ佐織。

「おうっ！」

敬礼して飛び出す私。

目指すは校舎裏！

風が冷たい。

マフラーに顔をうずめる。

49

私は校舎裏へ出る扉の前に立っていた。  
深呼吸する。

……少し落ち着いた。

私はドアノブを手に取る。……手のひらが少し汗ばんでいる。

思いきつて右に回す。

すると、田の前の木の下にキヨが座っていた。

「優秀じやん。6分で来たよ」

「カツと笑うキヨ。

「どのくらいかかると思った？」

うつ向き氣味に聞く私。

「100分」

「バカツ」

「うん。」  
「うん。」「うんで食べよっか?」

「マジで?」

「マジで?」

「うん。」「うんで食べよっか?」

「キヨ、『メソンね……お弁当……』  
「ああ、結局友達と食べたよ。『気にするな』  
「やうなんだ……」「  
……アツサリ言つんだな……」

私は少し拍子抜けした。心のどこかで、私とお風を過ごせなかつたことを残念がつてくれるかも……と期待していた。

その時、キヨは手をひざに伸ばして言った。

「弁当くれよ」  
「……はつ?」  
「あるんだろ。5時に起きて作ったやつ。お前の食べた余りでも良いから、くれよ」  
「……どうして?」  
「何で知ってるの?」  
「いきなり一緒に弁当食つなんでおかしこと想つたら、信子たちが教えてくれたよ。わざわざ早起きして弁当作つたんだ!」「……そうだよ」  
「オレ……今まで母さん以外に料理とか作つてもうつたこと無いんだ。だから……何ていうか、その……嬉しくて……」  
照れくさうなキヨ。

そんなキヨを見ていると、嬉しさが込みあげてくる。

「実はね、毎日飯イロイロあつて食べなかつたんだ。だから……いっぴあるよ

「食べる食べるー出してもー」

私はカバンからお弁当を2つ取り出して、水色の包みの方をキヨに渡した。

キヨは嬉しそうに受け取ると、手早く包みを開きお弁当箱を出した。

「開けるや」

「どうぞ、めしあがれ」

お弁当箱を開くキヨ。

「すげえ……ホントにお前が作ったのかよ?」

「そうだよ。……意外?」

「ちょっとな。でもうまそづ。いただきますー」

キヨは早速オーダギリを掴み、口に運ぶ。

「タラコじゅんつー大スキなんだよ!……知つてた?」

「知らなかつた……たまたまだよ。でも良かつた。私もタラコ好きだし

「せうかーやっぱタラコはつまいよなあー!」

まるで小さな子供みたいにはしゃぐキヨ。その姿は、到底プレイボーイには見えなかった。

私はその様子を見ながら自分の包みを開いて食べはじめた。

「…………あー、食つた食つた!」

腕を後ろで組み、寝ころぶキヨ。

「お前が、料理上手いわ」

「そう?……ありがと」

そんな事言われたら……黙れるよ。

「あのひ、明日から、こんな感じで作ってくれない? 5時に起きるんじゃなくて……お前の弁当のついで……とかで」

「良いけど、そんなに気に入ったの?」

「久しぶりだよ。手料理。なんか懐かしかった」

そう言って、キヨは少し寂しい顔をした。

「お母さんは? 今まで付き合つてた女のひとは?」

「母さんは家に居ないんだ。離婚してオレを連れて家を出たけど水商売やつてるんだ」

「そうだったの……」

知らなかつた……。

「だからさ、いつもコンビニで食事済ませてる。それに……」

キヨは起き上がり、私を見ながら言つた。

「今まで付き合つてた奴らは、遊ぶだけだったから。メシ作つてくれるほどの関係にはなれなかつた」

私はなぜか、キヨの心の声が聞こえた気がした。

キヨがプレイボーイなのは……寂しいからじゃないの?

お母さんは家に居ない。

他に頼る人も居ない。

……だから女人の人と取つ替え引っ替え付き合つてるんでしょ?

キヨは木の幹に寄りかかり、空を眺めていた。

私はそんなプレイボーイの肩にそつと寄りかかつて言った。

「明日から、一緒にお食べようね。私、キヨの好きなもの作るからね」

プレイボーイは答えるかわりに、私の肩を優しく抱きよせた。

## 目標の1週間

次の日から、私たちは私の作ったお弁当と一緒に食べる様になった。そうする内に、自然と一緒にいる時間が増えてきた。

朝登校してきたとき、休み時間、昼ごはん、放課後……。

そして、気付けば約束の1週間が迫ってきた。今のところ……かなり順調だと思う。見る限りでは、心変わりしそうな気配は無い。

キヨはプレイボーイではなくなった！1週間にとにかく女の人を取つ替える軽い男なんかじゃない！

そしていよいよ、ちょうど1週間の朝を迎えた。私は最初のように早起きしてちよつぴり豪華なお弁当を作り、学校へ向かった。

何かを話している。

「おっはよー佐織、信ちゃん！」  
私は元気よく声をかける。……ところが、一人は深刻そうな顔で

「どうしたの……？」一人とも  
私は一人の後ろから声をかける。  
「わつ！伊夜つ！？」  
「脅かさないでよ。おはよう、いよっち」

二人はかなり驚いたみたいだ。  
「何……？何かあった？」  
「気にしないで、こっちの話」  
なんで？……佐織は必死で何かを隠している……？

「つたく、いよっちは氣にしなくて良いのー。…信子も様子がおかしい……なぜ?」

その時、先生がやつて来て話はそこまでになつた。私は氣になつたものの、深くは追求しなかつた。

そして、待ちに待つた昼休みがやつて來た。私は弁当が2つ入ったカバンを手に、校舎裏へ行こうとした。

「いよっち、これからお弁当?……サヨヒ?」

確かめるように言ひ信子。

「そ、うだよっ! 何でつたつて、今日は付き合つて1週間田だし! 私は速く行きたくて、足踏みしながら走り。

「そつか……行つて、らつしちゃー」

佐織は苦笑いな顔で言ひ。…………もう少し明るくても良いいんじゅない?

私は少し早く校舎裏に着いた。キヨを待つ事にした。

……遅いなあ。

あと15分ぐらいで昼休みは終つてしまつ。

キーン、「ーン……  
チャイムが鳴つた。……予鈴だ。  
とうとうキヨは来なかつた。

沈んだ私は重たい足取りで教室へ向かつた。……なぜキヨは来なかつたんだろう? ……。

教室へ帰った私の表情を見ても、佐織と信子の態度は相変わらずで、同情や慰めは無かつた。

みんなおかしいよ。……隠し事ばかり……。

午後の授業は心、ここにあらずであつといつ間に放課後になつた。

私は一人で、いつも待ち合わせ場所にいた。

……なんで？キヨ。最近ははうとおじいぐらい一緒に居たのに……。顔見れなきゃ寂しいじやん。

ふと携帯を見た。

昨日は来ていた、キヨからのメール。

……キヨの声が聞きたいな。

電話しちゃおひ……。

私は携帯のアドレス帳からキヨの電話番号を呼び出し、発信ボタンを押した。

すると一度タイミング良く、少し遠くの方から携帯の着信音が聞こえた。

……キヨかもしない！

私は音のする方へ行ってみることにした。

この辺から聞こえたハズ……着信音はキヨのだった。

その時、女の人の声がした。

「ねえ、さつさき携帯鳴つてたよ。出なくて良かつたの?」  
すると聞き慣れた声がした。

「いいのいいの。それよりや、今日ウチ来る?」

……キヨ?

「行く行く。親、居ないでしょ?」

「モチ」

……楽しそうな笑い声。間違いない。あの女人の人と話してるのは  
キヨだ。

「あ、でもさ、彼女いるんじゃない? 噂で聞いたけど」

「女人の人」がキヨに尋ねた。

「居るよ。でも、オレはプレイボーイだから」

悪びれもせず、あっさりキヨが言つ。

「あはは、彼女かわいそお」

女人の人は笑いながら言つ。

そしてキヨたちは出口へ向かおつといつちくやつて來た。  
私は隠れる気力さえなかつた。

キヨは私を見つける。……氷ついたような顔のキヨ。  
後ろで女人の人があ

「誰、この子?」  
と尋ねるが全く反応しない。

私は、この世から消えてしまったかった。

プレイボーイはやっぱリプレイボーイだったのだ。

おわりぬなこかり。

お互い何も言わない。  
何も言えない。

「キヨ、もしかして彼女？」  
キヨの後ろの女の人は聞く。だが、相変わらずキヨから返事は無い。

結局彼女は、  
「私達、帰るね」

と告げてその場を立ち去ってしまった。

私の頭は考えることをやめたみたいに、はたらくことしない。  
キヨは下を向いて黙っている。

「さよなら」

私はそう言つて走り出した。それが私の意思かは分からない。気が  
づいたら走っていた。

後ろで声が聞こえた様な気もしたけど……私の足は止まらなかつ  
た。

家に着いた私は、キヨ用のお弁当をカバンから取りだし、リビングのテーブルに放りなげた。

「こえー……、弁当ぐらい洗<sup>えよ</sup>」

先に帰っていた中2の弟・涼汰<sup>りょうた</sup>が私に言った。

「食べてないから、あげる。部活あつたんでしょ?」

私はそう言い放つと自分の部屋へ向かつた。後ろから

「マジで? ラッキー」

という、今の私には出せない明るい声がした。

部屋に着くなり、私はベッドに倒れこんだ。……なんでかな……涙も出ないや。

私は制服のポケットから携帯を取りだし、キヨの履歴を消した。メールも電話もキヨの文字が無くなった携帯。

私は最後にアドレス帳からキヨを消した。

こうして、キヨは完全に私の携帯からいなくなつた。

分かっていたつもりだった。キヨはプレイボーイだ。一人の女で

満足するわけない。でも心のどこかで、もう大丈夫だと思っていた。

……私は甘かったの?

キヨには私じゃダメなんだ。夢見がちな私は……かえつて負担になつてしまふ。もつと広い、プレイボーイでも受け入れて付き合えるような人にならないと無理なんだ。

そんなにダメのかな……。好きな人に、私だけを見ててほしいって思うこと。やっぱり私は非現実的のかなあ。

私はワガママだ。プレイボーイなキヨにショックを受けたくせに……自分から別れを告げたくせに……。

まだキヨが好きだよ。

声が聞きたい。

笑つた顔が見たい。

それほどに、私はキヨが好きだつた。はじめはショウがないフレイボーライを更正せるつもりでも、今では自分の一部みたい。無くして気づいた。私はキヨが居ないとダメ。

普通の可愛らしさに女の方ならばとつぐに泣いてるけど、私は違う。

私はベッドから体を起します。

キヨが居ないとダメなら……キヨも私が居ないとダメなくらいにしなきやいけない。

私はナゼかふつきた。清々しい気分。まるで、心のリセッタボタンを押したみたいに。

またまだ諦めないから。そっちがそのつもつなら、レバもせいやつてやる。

その時、携帯が鳴つた。未登録の番号。でも、その番号には見覚えがあった。

「キヨ……？」

それは紛れもなく、キヨの電話番号だつた。初めて教えてもらつたとき嬉しくて暗記するぐらい見たから間違いない。

私は通話ボタンを押した。

『もしもし……伊夜……』

今まで全然聞いたことない、弱々しいキヨの声。

「何？」

『ごめん、えっと……さっきのは……こつから居た?』

「電話の話の辺り」

『そつ……そう……。あのせ、やっぱ怒った? もしかして、俺つてすでに元カレ?』

私は答えない。

『あの……伊夜?』

少し間を置き、私は少し深呼吸をしながら大きな声で話はじめた。  
「バツカジやないの? キヨはプレイボーイなんでしょ? 確かにショックで別れようかと思つたけど、冷静に考えたらそれつて私が負けたつて事じやない!』

『は? 負け?』

電話の向こうから、すっとんきょうな声。

「キヨがプレイボーイなんて汚名を晴らせる様に私は1週間やつてきたのに、それが出来なかつた上に逃げるなんて私がカッコ悪いわよ」

『あのわ……お前……』

私はキヨの言葉など無視して続ける。

「つまり! キヨが別れたいって言わない限り私は負けないし別れないわ。キヨは別れたい? 今日居たあの人と付き合いたい?』

私は一気に語りつと、苦しくて少し呼吸が荒くなつた。  
すると、キヨは予想外の反応を示した。

『ブツ……ハハハハツ! 伊夜、お前すぐえや!』

「な……何よ。笑わなくても良いじゃない」

『いや、「メン」「メン」。でもさ、怒られるか別れ話かと思つてたら  
一気に脱力したんだよ！……それに……』

「……それに？」

『負けたのは俺の方みたいだ。最近お前とずっと面のこちつとも  
飽きないからわ、なんかシャクだと思つて別の女と居ただけど……』

…

少し間を置いてキヨは言つた。

『お前ところ方が居心地良いみたいだ。だから俺、プレイボーイや  
める』

……それ、キヨが言つてるんだよね？嘘じや無いよね？

『だからさ、俺のこと、また頼むわ。かなり自分勝手だけど  
……しうがないな。ま、許してあげますよ。でも、今回だけだ  
からね』

少し涙声の私。……ナゼか今、涙が出る。

『分かった。それと、明日は弁当一緒に食おう。絶対行くから  
「分かつてます。来なかつたらキヨの分も食べるからね！』

しうがないな。明日も少し豪華なお弁当にしなくひや。

『オニーギリ、具はタラコなー』

『分かつてるよ。ちなみに今日もタラコだつたのに……』

『せうだつたのか……「メン』

『もういい。今日で付き合つて一週間田だつたから少し豪華にした  
けど、明日はもつと良いお弁当にするから』

『うん、待つてる』

電話の向こうから笑い声がする。

私も少し笑う。

『よし、じゃあ、また明日な』

「うそ、また明日」

いりして私たちはまた一緒にお弁当を食べるようになった。オーギリの具はタリゴ。飽きるまで入れ続けるつもりだ。

佐織と信子のひそひそ話はキヨの事で、女と語るところを見たので私に教えようかどうかを迷つていたらしく。でも次の日に打ち明けてくれ、私の話を聞いて安心していた。つづく、良い友達を持ったものだ。

ちなみに、私はキヨとの電話の後、もう一度電話をした。

キヨのメールアドを聞くために……。

再登録して一番はじめに来たキヨからのメールにはただ一言、  
『今度は消すなよ!』  
と書かれていた。

## ねむりぬなこかい。 (後書き)

1月まで読んで下せつた方々、ありがとうございました。なんとか完結出来ました。

この作品、とにかく更新が不定期でいいませんでした。この場を借りて謝ります。

では、この辺で。他の作品を見かけたときにまた曰を通して頂けると幸いです。  
本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2141a/>

---

彼氏が欲しい!!

2010年10月12日05時08分発行